

巻頭言

災害と畜産

出口孝吉

災害のないのが災害といわれる岡山県にとって、
本年は例年になく災害の多い年である。すなわち豪
雪に次ぐ長雨、集中豪雨と災害が重なり、とくに7
月11日の集中豪雨では、田畑、農作物の埋没、冠水、
建物の浸水、家畜の流失等の被害は激甚であった。
農林関係の被害額は長雨によるものが56億円、豪雨
については39億円におよんでいる。

この中で畜産については、飼料作物や家畜家禽、
クーラーステーションや試験場の施設等に被害を受
けたが耕地や農作物、山林関係に比べれば、その金
額は比較にならない程僅少である。

このように畜産関係の直接的な被害は、割合に小
額であるが、その影響は種々な面に現われてきてい
る。例えば農家手持飼料や現金収入の不足によって、
牛を手放す傾向が見受けられ、その結果牛価の低落
をもたらしている。もっともこれには他の要因もあ
るが、災害の影響を見逃すことはできない。県北の
ように豪雪から長雨、大雨と災害の重なった地帯で
農家の御苦労も大変なことである。しかしこういう
時期なればこそ、畜産を伸ばす好機であるとも云い
得る。多頭飼育、近代的な施設、計画的飼養等畜産
の経営基盤を確立しなければならない時期である。
幸いこのたび畜産経営拡大資金制度が創設され、肉
用牛と酪農の経営規模を拡大し、生産性の高い畜産
経営を確立しようとする農家にとっては、長期低利
の借入が可能になった。これを生かすためには、経
営技術の指導も新しい観点から行なう必要がある。

災害は忘れた頃にやってくる。農家を災害から救

うためには、安定度の高い畜産を発展させることが
大切である。また畜産の内部においては、多頭化、
企業化に伴って、防災の点を考慮するとともに、気
象災害のみでなく、社会的、経済的な変動に対しても
適切な対策を講ずる必要がある。